自己実現を図ろうとする態度を育成するキャリア教育の展開
― 学校の教育活動全体をつなぐ「キャリアノート」の活用を通して ―

呉市立広南中学校　岩城　祥子

研究の要約

本研究は，学校の教育活動全体をつなぐ「キャリアノート」の活用を通して，自己実現を図ろうとする態度を育成するキャリア教育の展開について考察したものである。文献研究から，「キャリアノート」の活用とは，活動や気付きを記録，蓄積することで，生徒が学びを振り返り，自己の成長や変容を自己評価したり，将来を展望したりする活動を行うことであると分かった。そこで，より効果的に活用するために，所属校で年度末のみ活用していた「キャリアノート」を，学校の教育活動全体を横断的につなぐ「キャリアノート」と系統的につなぐ「キャリアノート」に改善し，活用を図ることとした。具体的にはキャリア教育の要である特別活動において，各学期末の振り返りとして，各教科等の活動を一元化した振り返りでつなぐシートと，自己の学びを振り返る過程に沿った「キャリアノート」を開発し，活用した。あわせて，入学期，卒業期の振り返りとして，各教科等の学習や自己の成長，課題等を語り合いでつなぐ「キャリアノート」を開発，活用した。その結果，学校の教育活動全体をつなぐ「キャリアノート」の活用が，自己実現を図ろうとする態度を育成することに有効であることが分かった。

Ⅰ　主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成29年告示）（以下「指導要領」とする。）総則において，自己実現を図っていくことができるよう指導の充実を図ることや，特別活動を要として，キャリア教育の充実を図ることが明示された。

所属校では，学校の教育目標を達成するため七つの資質・能力を設定し，課題発見・解決学習を行ったり，各教科等を横断的につないだりして単元開発を行ってきた（以下「プロジェクト学習」とする。）。その成果として，平成29年度「基礎・基本」定着状況調査の質問紙調査において，所属校の育成を目指す資質・能力に関する項目で，80％以上の肯定的回答を得た。また，キャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力について，中学校キャリア教育の手引き（平成23年，以下「手引き」とする。）の「キャリア教育アンケートの一例」を基に，４段階評定尺度法で全校生徒56人にアンケートを実施した。その結果，キャリアプランニング能力の全校平均は3.09と最も低く，特に，第２学年の平均は2.78であった。これらのことから，生徒は育成を目指す七つの資質・能力が身に付いたと感じているものの，それを自己の将来とつないで考えられていないと捉えられる。

そこで，各学期末の学級活動において「プロジェクト学習」等，学校の教育活動全体を振り返りでつなぐ場を設定し，自己の将来とつないで考えられるようにする。その際，所属校の特色を生かして改善した「キャリアノート」を活用する。学校の教育活動全体をつなぐ「キャリアノート」の活用を通して，生徒に自己の成長を実感させ，自己実現を図ろうとする態度を育成するキャリア教育を展開できるのではないかと考え，本研究題目を設定した。

Ⅱ　研究の基本的な考え方

１　自己実現を図ろうとする態度の育成

(1) 自己実現とは

古川雅文（2016）は，「自己実現とは，個々人のもっている可能性を開花させ，自分らしい生き方を実現させていくことをさす。」[1)]と述べている。また，梶田叡一（1996）は，自己実現について，その人がその人になりきっていくことであり，その人が本当にやり遂げたいことをやり遂げられるようになることであると指摘している。さらに，田沼茂紀（2013）は，「自己実現とは，自分が志向する目的や理想の実現に向けて努力し，成し遂げることを意味する。」[2)]と述べている。

これらのことから，本研究では，自己実現とは，やり遂げたいこと，自分の志向する目的や理想の実現に向けて努力し，自分の可能性を開花させ，自分らしい生き方を実現していくことであるとする。

(2) 自己実現を図ろうとする態度を育成するとは

小原友行（平成20年）は，広島県におけるキャリア教育の大きな特色について，幼児期から発達段階に応じて子供たち一人一人に夢を育み，なりたい自分を探しながら自己の在り方生き方を考えていく自己実現型の取組を目指すことであると述べている。

また，「手引き」では，人は自己実現，自己の確立に向けて，社会と関わりながら生きようとするものであり，このことが生涯を通じてのキャリア発達となる。キャリア教育では，この一人一人のキャリア発達を支援しなければならないと指摘している。

さらに，中学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編（平成30年，以下「解説」とする。）では，自己実現に向けて，現在及び将来の自己の課題を発見し，よりよく改善しようとする視点が重要であると示されている。

これらのことから，本研究において，自己実現を図ろうとする態度を育成するとは，生徒が自己の課題に気付き，自己の志向する目的や理想の実現に向けて，改善しようと努力することによって自己の可能性を開花させ，自分らしい生き方を実現していこうとする態度を，教師が発達を支援する視点をもって育成することであるとする。

２　学校の教育活動全体をつなぐ「キャリアノート」の活用

(1) 学校の教育活動全体をつなぐ

ア　学校の教育活動全体を通して取り組むキャリア教育とは

長田徹ら（2017）は，「指導要領」総則に「キャリア教育の充実」が明記されたということは，キャリア教育は教育課程全体に係るという意味であり，教育活動全体を通して必要な資質・能力の育成を図っていく取組が求められると指摘している。

この資質・能力について，藤田晃之（2014）は，子供たちに身に付けさせたい力を具体化し，教育的な意図に基づいて実践した「キャリア教育の断片」を相互につなぎ，体系的・系統的な指導へと転換していく必要があると述べている。また，子供たちには，その断片をつなぎ合わせて全体を見通す力は備わってはいないと指摘している。

これらのことから，学校の教育活動全体を通して取り組むキャリア教育とは，教育活動全体を通して必要な資質・能力の育成を図るものであり，その資質・能力を相互につなぎ，体系的・系統的な指導へと転換する必要があると考える。

イ　学校の教育活動全体をつなぐために

Ｃ．ファデルら（2016）は，21世紀に目指す学校教育の三つの次元（知識，スキル，人間性特徴）の学びを深め，促進する第四の重要な次元としてメタ学習を紹介している。メタ学習とは，学び方の学習とも呼ばれ，学習について振り返ったり，修正したりする際の内面的プロセスであると述べている。また，和栗百恵（2014）は，経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）が提示した三つのキー・コンピテンシー（活用する力，人間関係形成力，自律的に行動する力）を結ぶものとして，リフレクティブネス（振り返りができること）があると指摘している。

これらのことから，資質・能力をつなぐために振り返りが重要であると捉えることができる。

以上のことから，本研究において，学校の教育活動全体をつなぐとは，教育活動全体を通してキャリア教育における必要な資質・能力の育成を図り，その資質・能力を相互につなぐ体系的・系統的な振り返りを行うことであるとする。

(2) 「キャリアノート」の活用について

ア　「キャリアノート」の活用とは

「キャリアノート」は，次のように，さまざまな呼称の例があるが，本研究では，どれも同じ機能をもつものとして捉え，これらの総称を「キャリアノート」として扱っていく。

○「キャリア・パスポート」（仮称） ○「わたしのキャリアノート～夢のスケッチブック～」 ○「キャリア・ノート」

「キャリアノート」のさまざまな呼称の例[1]

幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年，以下「中教審答申」とする。）においては，学校の教育活動全体を通じたキャリア教育の充実を図るために，「キャリア・パスポート（仮称）」の活用を図ることが示されている。これは，ポートフォリオの機能をもつ教材で，学びの履歴を積み重ね，学びを振り返ったり，将来の学びの予定を考えたりすることを支援する仕組みであると紹介されている。

また，「解説」では，生徒が活動や気付き，考えを記録し蓄積するポートフォリオ的な教材の活用

を通して，自身の成長や変容を自己評価したり，将来の社会生活や職業生活を展望したりする活動が求められていると示されている。

これらのことから，「キャリアノート」の活用とは，生徒が活動したことや考えたことを記録し蓄積することで，学びを振り返り，自己の成長や変容を自己評価したり，将来を展望したりする活動を行うことであると考える。では，この「キャリアノート」の活用を行う意義とは，どのようなことだろうか。

イ　「キャリアノート」の活用の意義

「解説」では「キャリアノート」の活用の意義について，三点述べている。

・中学校の教育活動全体で行うキャリア教育の要としての特別活動の意義が明確になる。各教科等の学習や特別活動において学んだことの振り返りを適宜蓄積し，学級活動においてまとめたりつなぎ合わせたりすることで，学ぶ意義についての自覚が深まったり，学ぶ意欲が高まったりする。
・小学校，中学校，高等学校の各段階における学習や生活を振り返って蓄積していくことにより，発達の段階に応じた系統的なキャリア教育を充実させることになる。
・生徒にとって自己理解を深めるためのものになることである。自己の己の成長を把握し，それを基に教師との対話や生徒同士の話し合い等を行うことを通して，自己理解が深まる。

「キャリアノート」の活用の意義(2)

「キャリア・パスポート」導入に向けた調査研究協力者会議（第１回）議事録（平成30年，以下「調査研究協力者会議」とする。）では，このことについて，学校の教育活動全体の横をつなぐ，小学校，中学校，高等学校の縦をつなぐ，そして，生徒理解につなぐ意義があると指摘している。

このことから，「キャリアノート」の活用の意義とは，特別活動をキャリア教育の要として，各教科等の学びを，学級活動において横断的につなぎ，小学校，中学校，高等学校の振り返りを蓄積していくことにより，各発達の段階を系統的につなぐことであると捉えることができる。

以上のことから，学校の教育活動全体をつなぐ「キャリアノート」の活用とは，活動したことや考えたことを生徒が記録，蓄積し，学級活動において，学びを振り返ることにより，学校の教育活動全体で育成を目指す資質・能力を横断的，系統的につなぎ，自己の成長や変容を自己評価したり，将来を展望したりすることで，自己実現を図ろうとする態度を育成することにつながると捉えられる。

３　学校の教育活動全体をつなぐ「キャリアノート」の活用に向けて

(1) 学校の教育活動全体を横断的，系統的につなぐ「キャリアノート」の３年間の活用計画について

前述Ⅱ２より，「キャリアノート」は学校の教育活動全体を横断的，系統的につなぐ必要があると考える。長田徹ら（2017）は，日常の授業や行事等の記録を基に，学期や年間，入学から卒業を見通し，振り返る「キャリアノート」の好事例として，秋田県教育庁義務教育課（以下秋田県とする。）や兵庫県教育委員会（以下兵庫県とする。）の「キャリアノート」を紹介している。ホームページ上で公開している秋田県，兵庫県及び文部科学省の「キャリアノート」の内容を表１に示した。

表１　ホームページ上で公開している秋田県，兵庫県及び文部科学省の「キャリアノート」の内容

「キャリアノート」	内容	
秋田県「AKITA de DREAM」	第１・２・３学年	・各学年の目標　・１年間を振り返る
	私の履歴書	各学年での係活動・委員会活動・好きな教科・興味・関心があること・部活動等・表彰・資格・将来の夢・３年間の思い出
	中学校３年間を振り返る（残しておきたい記録を残す）	
兵庫県「キャリアノート」	第１学年	自己理解・学ぶ意味・人とのつながり・１年間の振り返り等
	第２学年	トライやるウィークの振り返り・人とのつながり・進路について・１年間の振り返り等
	第３学年	将来の自分について・進路先調べ・人とのつながり・将来の自分について等
文部科学省「キャリア・パスポート」（試案）	第１・２・３学年	各学年初め・各学期の振り返り・各学年末の振り返り
	私の履歴～小学校１年から中学校３年，９年の足あと～	小学校の振り返り・中学校の振り返り・将来の自分（30歳の私）・中学校３年間を振り返り，書きとめておきたいこと

これらに共通する内容から，「キャリアノート」には，以下のように四つの要素の振り返りが必要であると捉えられる。

○　具体的な学習の振り返り
○　学期末の振り返り
○　学年末の振り返り
○　小学校，中学校の振り返り

「キャリアノート」に必要な四つの要素

所属校の「キャリアノート」の活用においても，横断的，系統的な活用にするために，この四つの要素を反映させることが不可欠であると考える。

まず，各教科等の具体的な学習の振り返りを用いて，学期末や学年末を振り返る「キャリアノート」（以下学期末「キャリアノート」，学年末「キャリアノート」とする。）を，学校の教育活動全体を横断的につなぐ「キャリアノート」として位置付ける。

また，文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（平成30年）では，小中高12年間において，節目となる入学期，卒業期には，自分の成長を振り返りながら現在の自分を見つめ，自分の将来や働きたい仕事，生き方を考えることがで

きるようキャリアノートを構成すると示されている。このことから，中学校入学期における小学校生活を振り返る「キャリアノート」（以下入学期「キャリアノート」とする。）と，中学校卒業期における小学校・中学校生活を振り返る「キャリアノート」（以下卒業期「キャリアノート」とする。）を，学校の教育活動全体を系統的につなぐ「キャリアノート」として位置付けることとする。

以上のようにして，「キャリアノート」の３年間の活用計画を作成したものが表２である。本研究では，表２の３年間の活用計画を基に，「キャリアノート」の作成，活用を行うこととする。なお，本研究においては，学年末「キャリアノート」については，作成のみとする。

表２　「キャリアノート」の３年間の活用計画

第１学年 「キャリアノート」	第２学年 「キャリアノート」	第３学年 「キャリアノート」
○入学期 ○学期末 ○学年末	○学期末 ○学年末	○学期末 ○学年末 ○卒業期

(2) 所属校の特色を生かした「キャリアノート」として活用するために

「中教審答申」の「キャリアノート」の活用の留意点や永井博美（平成30年）の指摘にもあるように，各学校や地域の特色を生かすため，所属校で育成を目指す資質・能力の取組状況に応じ，基礎的・汎用的能力と関連付けた「キャリアノート」にする必要があると考える。

ア　所属校で育成を目指す資質・能力と，所属校で取り組んでいる「プロジェクト学習」

所属校では，教育目標を「未来を創る」とし，育成を目指す資質・能力を七つ設定している（表３，太字）。

表３　所属校で育成を目指す資質・能力

資質・能力				目指す学びの姿
力	問題解決へ向かう探求の能力	知識・技能	**知識・技能**	学んだ知識や技能を活用することができる。
		思考力・判断力・表現力等	**情報収集・判断**	尋ねたり，調べたり，試したりして，必要なものを見付け，選び出すことができる。
			思考・表現	しっかり考えて，学びを自分のものにして表現できる。
志	主体的・協働的に地域社会に参画しようとする意欲と態度	学びに向かう力・人間性等	**協力・協働**	他の人と協力し，いろいろな意見やそれぞれの力を生かすことができる。
			感謝・貢献	感謝の気持ちをもち，自分なりに貢献することができる。
			責任・使命	自分の役割や使命を考え，するべきことを行うことができる。
			挑戦・探究	夢や疑問，できないことを大切にし，見通しをもって粘り強く学び続けることができる。

これは，「指導要領」で示された育成を目指す資質・能力（「知識及び技能」の習得，「思考力，判断力，表現力等」の育成，「学びに向かう力，人間性等」の涵養）の三つの柱を基準に，学校の教育目標や実態に合わせて整理したものである。

また，資質・能力を育成するために所属校で取り組んでいる「プロジェクト学習」を表４に示す。

表４　平成30年度　所属校の「プロジェクト学習」

	第１学年	第２学年	第３学年
一学期	○総合的な学習の時間「生き方学習」 ○運動会（保健体育＋特別活動）	○総合的な学習の時間「生き方学習」 ○運動会（保健体育＋特別活動）	☆理科「生命の連続性」 ○総合的な学習の時間「生き方学習」 ○運動会（保健体育＋特別活動）
二学期	☆国語「竹取物語」 ☆理科「身のまわりの物質」 ☆数学「比例・反比例」 ○音楽「合唱」（特別活動） ○総合的な学習の時間「ふるさと学習」 ○文化活動発表会（音楽＋総合的な学習の時間＋特別活動）	☆理科「天気とその変化」 ○音楽「合唱」（特別活動） ○保健体育（道徳）「長距離走」 ○総合的な学習の時間「ふるさと学習」 ○文化活動発表会（音楽＋総合的な学習の時間＋特別活動）	○数学「平方根」（技術・家庭〔家庭分野〕） ○音楽「合唱」（特別活動） ○総合的な学習の時間「ふるさと学習」 ○文化活動発表会（音楽＋総合的な学習の時間＋特別活動）
三学期	☆理科「エネルギー」 ☆英語「ＡＬＴに学校生活について紹介しよう」	☆数学「確率」 ☆理科「天気」 ☆英語「ＡＬＴに地域について紹介しよう」	○英語（音楽＋総合的な学習の時間）「ＡＬＴに日本文化について紹介しよう」

※☆は課題発見・解決学習，（　）内は横断した教科等

所属校では育成を目指す資質・能力について，各「プロジェクト学習」の単元末に，行動指標を明確にしたルーブリック（４段階の評価基準）での自己評価と，感想と気付きを書く振り返りを行っている。

イ　所属校で育成を目指す資質・能力とキャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力との関係

所属校で育成を目指す資質・能力の振り返りを「キャリアノート」に活用するために，前述の行動指標を明確にしたルーブリックと，「手引き」の基礎的・汎用的能力の内容を参考にして，所属校で育成を目指す資質・能力とキャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力との関係を整理し，表５に示す。

表５　所属校で育成を目指す資質・能力とキャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力

資質・能力	ルーブリック 評価基準（ＳまたはＡ評価）	基礎的・汎用的能力
知識・技能	学んだ知識や技能を活用して，別の課題の見通しも得ることができる。	**課題対応能力**
情報収集・判断	尋ねたり，調べたり，試したりして，必要なものを見付け，ものの見方や考え方を広げ，深めることができる。	
思考・表現	しっかり考えて，学びを自分のものにし，工夫や意見を加えて表現できる。	
協力・協働	他の人と協力し，いろいろな意見やそれぞれの力を生かして課題を解決することができる。	**人間関係形成・社会形成能力**
感謝・貢献	感謝・貢献することを重ねることで，絆を深めることができる。	
責任・使命	自分の役割や使命を考え，生き方の目標を見付け出すことができる。	**キャリアプランニング能力**
挑戦・探究	夢や疑問，できないことを大切にし，新しい自分やものを作り出すことができる。	**自己理解・自己管理能力**

※下線は着目した語句（稿者による）

前頁表５を基に，「キャリアノート」を作成していくこととする。

Ⅲ　「キャリアノート」の効果的な活用に向けて

１　入学期「キャリアノート」，卒業期「キャリアノート」の活用に向けて

(1) 節目における振り返り

金井壽宏（2003）は，キャリアは特に節目を意識すべきものであり，節目をくぐりながら，今ここにいるという自分の歩みが意味付けられると指摘している。また，松井賢二（2007）は，自分がどういう人間か，どういうことができ，どういうことができないのかという現実の自己と，自分は将来どういう人間であり，どういう役割を果たす人間になりたいかという理想の自己について，自分自身が描くことが，キャリア教育には不可欠であると述べている。

これらのことから，節目における振り返りについて，生徒自身が自分の歩みを意味付け，自分がどういう人間か，どういうことができ，どういうことができないのか，現実の自己を見つめるとともに，将来はどういう人間でありたいか，どういう役割を果たしたいかなど理想の自己を描く活動を設定することとする。

(2) 学校の教育活動全体を系統的につなぐ「キャリアノート」の活用

マーク・Ｌ・サビカス（2015）は，人は自分の人生を手に入れるために過去の役割を自覚し，現在の役割を分析し未来の役割を予測するとし，この自意識的内省をストーリーとして紹介している。このストーリーについて，特定の出来事を報告する小さなストーリーを統合することによって，人生に意味と実体を与えていくとしている。つまり，過去の事実を再構成し，ストーリーを語ることは，意味を作り出し未来を形作るための積極的な試みであると述べている。

このことから，学校の教育活動全体を系統的につなぐ「キャリアノート」の活用に向けて，これまで自分が何をしてきたのか，過去の出来事を自分の歩みとして語りつなぐ場を設ける。ここで，自分にはどういうことができて，どういうことができないかという現実の自己に気付き，自分は将来どういう人間でありたいか，どういう役割を果たしたいかなど理想の自己を描く活動を行う。

その際，小学校生活や中学校生活の中で，生徒自身が成長したと感じる学習や活動について振り返り，その振り返りを基にして，できるようになったことやできないことなど，現実の自己に気付くことができると考える。

所属校の第３学年は，第１学年時から各教科等での「プロジェクト学習」を実践してきた学年である。この「プロジェクト学習」一つ一つを前述の小さなストーリーとして捉え，生徒自身が「プロジェクト学習」に関する自己の学びの振り返りを語ることによって，過去の事実を再構成する場を設定し，生徒が自己の成長や課題に気付き，将来の自己の在り方生き方を描く活動を行う。

学校の教育活動全体を系統的につなぐ入学期「キャリアノート」と，卒業期「キャリアノート」の振り返る過程を図１に示す。また，入学期「キャリアノート」を別紙資料２，卒業期「キャリアノート」を別紙資料７に示す。

<table>
<tr><th colspan="3">入学期「キャリアノート」</th><th>第１学年</th></tr>
<tr><td rowspan="5">振り返る過程</td><td rowspan="3">つなぐ</td><td>小学校生活での，低・中・高学年でがんばったことや楽しかったこと，成長したこと。そう思った理由。</td><td></td></tr>
<tr><td>一番印象に残っていることと，その理由。</td><td></td></tr>
<tr><td>将来の夢についての変遷。理由も付けて書く。その仕事に就きたいと思った理由。</td><td rowspan="2">語り合い</td></tr>
<tr><td>気付く</td><td>成長したところや，課題のあるところ。</td></tr>
<tr><td>描く</td><td>中学校生活で大切にしたいことや努力したいこと。</td><td></td></tr>
<tr><th colspan="3">卒業期「キャリアノート」</th><th>第３学年</th></tr>
<tr><td rowspan="5">振り返る過程</td><td rowspan="3">つなぐ</td><td>小学校生活で，印象に残っていることと，その理由。</td><td></td></tr>
<tr><td>印象に残った「プロジェクト学習」や取組のことと，その理由。</td><td></td></tr>
<tr><td>資質・能力を振り返って，考えたこと，感想など。</td><td rowspan="2">語り合い</td></tr>
<tr><td>気付く</td><td>自分の成長したことや課題。そう思う理由。</td></tr>
<tr><td>描く</td><td>30歳になった自分が大切にしていたいこと，努力していたいこと。</td><td></td></tr>
</table>

図１　学校の教育活動全体を系統的につなぐ「キャリアノート」の振り返る過程

２　学期末「キャリアノート」の活用に向けて

(1) 学校の教育活動全体を横断的につなぐ「キャリアノート」作成

学校の教育活動全体を横断的につなぐ「キャリアノート」の活用に向けて，自己の学びの振り返りの過程を整理する必要があると考えた。そこで，兵庫県（平成26年）の「キャリアノート」教師用指導資料，新潟県上越市立大手町小学校（2015），田村学（2018）を参考とし，自己の学びを振り返る過程をまとめ，稿者が整理したものを次頁表６に示す。この過程には，四つの段階があると捉え，①から④に分類した。それぞれの段階を「キャリアノート」に反映させるため，改善を図っていくこととする。

表６　自己の学びを振り返る過程

	①	②	③	④
兵庫県	活動の振り返り	自己の成長や変容を実感する	―	進路選択や将来の決定の参考
上越市立天手町小学校	学んだことや活動したことを書きためる学びのシール	学びの様相や自己の成長に気付く	複数の学びを結びつけて新たな学びに気付く	自分にとって大切な学びを追求する
田村学	学習内容を確認する振り返り	学習内容と自らをつなげ，自己変容を自覚する	学習内容を現在や過去の内容と関連付けたり一般化したりする	次の学習活動へ意欲をつなぐ
稿者	**具体的な学習を振り返りでつなぐシート**	**自己の成長や課題，改善の方法**	**学びの関連付け，一般化**	**将来の自己の在り方生き方**

※〇内の数字は稿者による

(2) ①具体的な学習を振り返りでつなぐ「志と力シート」の作成

長田ら（2017）は，学期や年単位での振り返りにおいて，自分の変容や思いを記述するためには，授業での自己評価票やワークシート，行事等を振り返った作文等の基礎資料が必要であると指摘している。また，鈴木敏江（2000）は，さまざまなポートフォリオを「凝縮ポートフォリオ」にすることで，フィードバックのための自己評価を行うことができるとしている。そこで，所属校において，基礎資料を凝縮しまとめたポートフォリオを作成することとする。

さらに，鹿毛雅治（2013）は，学習内容に焦点化した到達度評価と，縦断的，横断的な個人内評価を組み合わせて可視化すると，できるようになってきたという実感が生じて学習意欲が高まり，学習者の改善を促すと述べている。つまり，所属校のルーブリックにおける４段階評価を到達度評価とし，その評価理由について，自分の学ぶ姿から記述したものを個人内評価として組み合わせることが学習意欲の向上や学習者の改善に効果的であると考える。

以上のようにして，学期ごとに，各「プロジェクト学習」の単元末で行ったルーブリックによる自己評価と振り返りの記述文を基礎資料として，「志と力シート」を作成し，活用することとする。この「志と力シート」の内容を表７に示す。

表７　「志と力シート」の内容

記号	内容
ⓐ	１学期の「プロジェクト学習」の名称。
ⓑ	３(２)イで明らかにした，キャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力と所属校で育成を目指す資質・能力。
ⓒ	これまでの「プロジェクト学習」の単元末で，記入した自己評価を書き写す。ルーブリックを用いたＳ，Ａ，Ｂ，Ｃまでの４段階の到達度評価で記述。
ⓓ	生徒自身が根拠を明らかにすることで，どの資質・能力が成長したかを縦断的，横断的に見取ることができるよう，なぜその評価にしたのかを記述。

※ⓐ～ⓓは，図２太枠内と同じ記号を示す

また，図２に，１学期の「プロジェクト学習」を振り返りでつなぐ「志と力シート」第２学年の例を示す。

「志と力シート」　第（　）学年（　）番　氏名〔　　〕平成30年8月22日(水)

振り返り用紙を使って，七つの資質・能力の自己評価を記入し，なぜその評価にしたのか，評価の理由を書きましょう。

基礎的・汎用的能力	資質能力	運動会（保健体育・特別活動）ⓐ 自己評価	運動会（保健体育・特別活動）ⓐ 自己評価の理由	総合的な学習の時間 自己評価	総合的な学習の時間 自己評価の理由
ⓑ 課題対応能力	知識・技能				
	情報収集・判断	ⓒ	ⓓ		
	思考・表現				
人間関係形成・社会形成能力	協力・協働				
	感謝・貢献				
キャリアプランニング能力	責任・使命				
自己理解・自己管理能力	挑戦・探究				

この表を見て，感じたこと，考えたことを書きましょう。

図２　１学期の「プロジェクト学習」を振り返りでつなぐ「志と力シート」第２学年の例

この「志と力シート」の活用により，各学期における「プロジェクト学習」を横断的につなぎ振り返ることができると考える。

(3) ②自己の成長や課題，改善の方法

表６の②以降は，別紙資料３，学期末「キャリアノート」の活用について述べていく。図２の「志と力シート」を活用して，生徒にできるようになってきたという実感をもたせ，自己の成長や課題，改善の方法について記述させる。また，二宮衆一（2015）は，子供たち同士による相互評価でメタ認知能力を育成することの重要性を述べている。実際，所属校において，自己の成長や課題などについて，正確な自己評価が困難な生徒もいる可能性が考えられる。そこで，自己の学びや振り返りについて，学級活動の中で，友だちからの評価を受ける交流の時間を設定する。

(4) ③学びの関連付け，一般化

エリック・デ・コルテ（2013）は，各教科や教育の最終目標は，「適応的熟達化」であると述べている。これは，柔軟かつ創造的に応用する能力であり，この能力の重要な要素は，メタ認知や，自己調整スキルであると指摘している。また，三橋和博（2015）

は，各教科等で身に付けた知識や技能を関連付けて振り返ることで，学習内容が他の教科等の学びの場面や生活場面で生かせたり，支えになったりすることに気付くことができると述べている。

これらのことから，学習の振り返りをすることで，学んだことを関連付けたり，活用できる場面を考えたりすることによって，学習の最終目標である「適応的熟達化」を促すことにつながると考える。

前頁表６における上越市立大手町小学校（2015）では，②の学びの様相や成長に気付くことを，事実の気付き，③の複数の学びを結びつけて新たな学びに気付くことを，関わりの気付きと指摘している。このことから，前頁表６における②，③を，気付く場面であると捉えることができる。

(5) ④将来の自己の在り方生き方及び教師との対話的評価

鈴木（2000）は，自己の成長の変化を確認できるポートフォリオを作ることは，できることをさらに伸ばそうという気持ちにさせ，子供自身が本当に願う目標を明確にし，その目標を達成させたいという強い決意を誘うと述べている。また，C．ファデルら（2016）は，Ⅱ２（１）イで述べたメタ学習が，自らを成長へと推し進める成長的思考態度を育成すると指摘している。

これらのことから，振り返りのまとめとして，目標としての，これから大切にしたい学びや努力したいことを生徒自身が考えることによって，将来の自己の在り方生き方を描く場を設定することとする。

さらに，二宮（2015）は，生徒が自らの学習を振り返るためには生徒の自己決定を尊重する教師の「外的評価」と生徒の「内的評価」の双方向的な関係が，学習を成功させると述べている。

このことから，教師・保護者からの，生徒の自己決定を尊重する評価と，その評価を受けて，生徒が思いや考えを記述するという対話的評価を設定することとする。

(6) 学期末「キャリアノート」の作成と活用

Ⅲ２（１）～（５）を踏まえ，各学期の「プロジェクト学習」を振り返る「志と力シート」及び学期末「キャリアノート」を作成し，活用する。この「志と力シート」及び学期末「キャリアノート」の作成の視点を表８に示す。

なお，○内の数字は，前頁表６の○内の数字と同じものを示す。㋐～㋔は，別紙資料３内と同じ記号箇所を示す。

表８　「志と力シート」及び学期末「キャリアノート」の作成の視点

	表6項目	自己の学びを振り返る過程			作成の視点
志と力シート	①	つなぐ		具体的な学習を振り返りでつなぐシート	当該学期に行った各「プロジェクト学習」の資質・能力の振り返りでつなぐ。到達度評価と個人内評価を記述する。
学期末「キャリアノート」	②	気付く	㋐	自己の成長や課題，改善の方法	「志と力シート」を活用して自己の成長や課題に気付く。根拠を明らかにして，自分の気付きを記述する。
			㋑	友だちからの評価	友だちと相互評価を行い，交流することで，自己の成長に気付く。
	③		㋒	学びの関連付け，一般化	「志と力シート」で，それぞれの「プロジェクト学習」で身に付いた資質・能力が他の学びや生活場面で活用できることなどに気付く。
	④	描く	㋓	将来の自己の在り方生き方	メタ学習によって，成長的思考態度が育成され，「成長したい」という思いをもつ。
			㋔	教師・保護者との対話的評価	指導をした教師や保護者からの評価（コメント）を受けて，自分の思いや考えを記述することで，対話の形とする。対話的評価により，自己実現を図ろうとする態度を促す。

３　研究構想図

本研究の研究構想図を図３に示す。

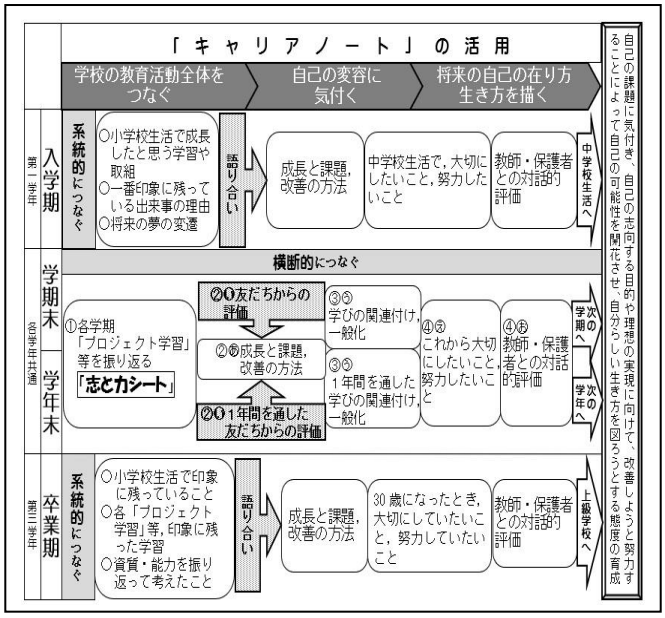

図３　研究構想図

Ⅳ　研究の仮説及び検証の視点と方法

１　研究の仮説

学級活動において，学校の教育活動全体を横断的，系統的につなぐ「キャリアノート」を活用することによって，生徒が自己の成長や課題に気付き，改善しようとすることで，自己実現を図ろうとする態度を育成することができるであろう。

２　検証の視点と方法

検証の視点と方法について，次頁表９に示す。

表９　検証の視点と方法

視点	方法
学校の教育活動全体を横断的につなぐ「キャリアノート」の活用によって，自己の成長や課題に気付き，改善の方法を考え，自己実現を図ろうとする態度が育成されていたか。	・「志とカシート」 ・「キャリアノート」 ・事前事後アンケート ・キャリア教育アンケート
学校の教育活動全体を系統的につなぐ「キャリアノート」を活用することによって，自己の成長や課題に気付き，自己実現を図ろうとする態度が育成されていたか。	

Ⅴ　研究授業について

本研究における「キャリアノート」を活用する研究授業について表10に示す。

表10　本研究における「キャリアノート」を活用する研究授業

「キャリアノート」	対象学年	実施時期	研究授業
入学期	第１学年	２学期末	研究授業1
学期末	全学年	１・２学期末	研究授業2，3
卒業期	第３学年	２学期末	研究授業4

入学期「キャリアノート」を活用する授業は，本年度は第１学年の２学期末に実施し検証する。また，卒業期「キャリアノート」を活用する授業は，２学期末に実施する。一般的には３学期が望ましいが，所属校の第３学年においては，ほとんどの「プロジェクト学習」が２学期までに終わるために，12月に実施することができると考えたためである。

Ⅵ　入学期「キャリアノート」を活用する研究授業1について

１　研究授業1の概要

研究授業1の概要を表11に示す。

表11　研究授業1の概要

項目	内容
月日	平成30年12月７日
題材名	６年間を振り返り，自分の成長を語り合い，将来の自分について考えよう
内容	（３）一人一人のキャリア形成と自己実現 ア　社会生活，職業生活との接続を踏まえた主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用
対象学年	第１学年（17人）
目標	小学校生活を振り返り，成長したことや，小学校の頃の夢を語り合い，これからの中学校生活の目標を考えよう。
活動内容	○小学校生活を振り返り，自己の成長や課題に気付く。 ○自分の成長や課題を友だちに語り合う。 ○中学校では，どんなことを大切にしたり努力したりしたいか，自分の思いをもつ。

２　研究授業1の分析と考察

(1) 小学校生活を振り返ることによって，自己の成長や課題に気付くことができたか

図４に研究授業1の事後アンケート結果１を示す。「小学校生活を振り返ることで，自分の成長や課題に気付くことができた」の質問項目では，「成長に気付くことができた」に関して，6.6%（１人）が否定的評価をしている。この１人は，「中学校生活で大切にしたいことや努力したいこと」という質問項目について，「小学校から課題が変わっていないので，中学校でなおしていきたい」と記述している。課題が変わっていないことが，自分が成長していないことだと捉えていると考えられる。また，「課題に気付くことができた」に関しては，全員が肯定的評価であった。

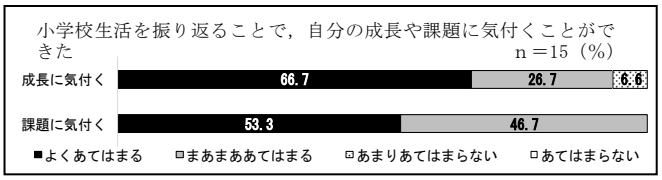

図４　研究授業1の事後アンケート結果１

(2) 小学校生活を振り返ることによって，中学校での目標や，大切にしたいこと，努力したいことを考えることができていたか

ア　事後アンケートについて

「小学校生活を振り返ることは，目標をもつ上で役に立った」という質問項目での，事後アンケートの結果２を図５に示す。全員が肯定的評価であった。

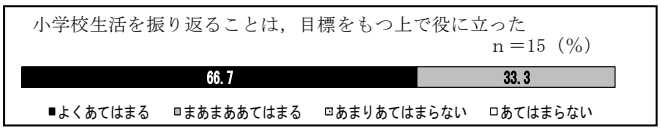

図５　研究授業1の事後アンケート結果２

イ　入学期「キャリアノート」の生徒の記述について

「中学校生活ではどんなことを大切にしたり，努力したりしたいですか，小学校生活を振り返って書きましょう」という項目を設定した。「小学校を振り返って」という視点をもって記述した生徒は，16人中10人であった。以下は，小学生の頃の課題や思いを振り返る記述の一部である。

○**小学校の時はまだ小さくて分からないこともたくさんあったけど**，中学生になって将来のことも真剣に考えられるようになったので，この時間をつかってもう少し詳しく考えていきたいです。
○これからがんばりたいことはテストです。**小学生の頃は，このくらいでいいやの気持ちでテストを受けていました**。中学生になって目標の90点台を目指してがんばりたいです。

小学生の頃の課題や思いを振り返る記述の一部

この記述内容から，中学生になった今，「小学生の時は分からないこともたくさんあった」ということに気付き，中学校生活での大切にしたい学びを改めて考える姿や，小学生の時のテストに対する姿勢を振り返り，中学生として目標をもって取り組もう

とする姿勢がうかがえる。このことから，小学校生活を振り返り，成長や課題に気付くことによって，中学校生活でどのようなことを大切にしたいかを考えることができたと捉えられる。

３　研究授業①の成果と課題

以上のことから，入学期「キャリアノート」を活用することで，中学校で大切にしたいことや努力したいことを考えることができたと捉える。しかし，12月の実施について検討する必要があると考える。節目として振り返ることを重視するならば，入学期に実施した方がよいと判断する学校もあると考える。それぞれの学校や生徒の実態を踏まえて計画する必要があると考える。

Ⅶ　学期末「キャリアノート」を活用する研究授業②，③について

１　研究授業②の概要

研究授業②の概要を表12に示す。

表12　研究授業②の概要

項目		内容
月日		平成30年8月22日～23日
題材名		七つの資質・能力を振り返り，なりたい自分を発見しよう
内容		(3)一人一人のキャリア形成と自己実現 ア　社会生活，職業生活との接続を踏まえた主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用
対象学年		第１学年（17人），第２学年（22人），第３学年（17人）＊授業は学年別で行う
第１時	目標	キャリアについて理解し，七つの資質・能力を振り返ろう
	活動内容	キャリア発達課題について理解し，「プロジェクト学習」での七つの資質・能力を振り返り「志と力シート」にまとめる。
第２時	目標	「キャリアノート」を活用して，なりたい自分を発見しよう
	活動内容	○「志と力シート」を見て，自己の成長や課題に気付き，改善策を考える。 ○自己の成長や課題，改善策について，友だちと交流し，友だちの成長したところや，アドバイス等をカードに書き，伝える。 ○学んだことを他の場面でも活用できるか考える。 ○今後大切にしていきたい学びについて考える。

２　研究授業②の分析と考察

(1) 具体的な学習を振り返りでつなぐ「志と力シート」の活用によって，自己の成長や課題に気付き，改善の方法が考えられていたか

ア　事前・事後アンケートから

研究授業②の事前・事後アンケートの結果１を図６に示す。ｔ検定の結果，「志と力シート」を活用することで「自分の課題を考えることができた」「自分の課題について改善の方法を考えることができた」に関して，有意な差（$p<0.01$）が見られた。また，事後アンケートで，「自分のよさや成長を実感することができた」に否定的な回答をした６％（３人）は，「キャリアノート」では，自己のよさや成長について記述することができていた。一方で，「自分の課題を考えることができた」に否定的な回答をした１人は，第１時の授業に不参加であったため，充分に「志と力シート」に記述できていなかった。そのため，自己の成長や課題に気付き，改善の方法を考えられなかったと捉えられる。

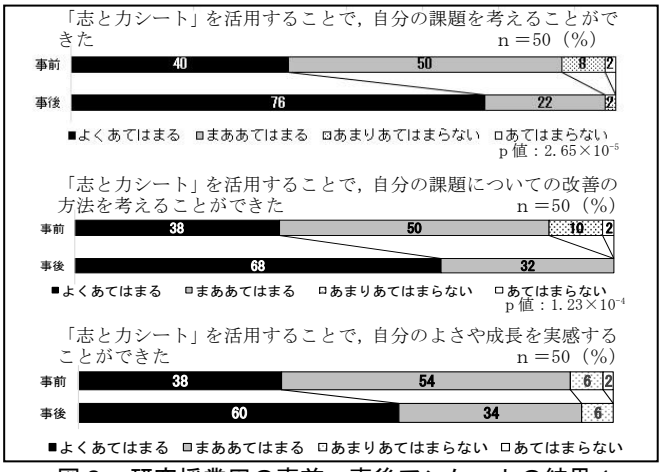

図６　研究授業②の事前・事後アンケートの結果１

イ　「志と力シート」の活用について

「志と力シート」を活用して，学期末「キャリアノート」の成長や課題，改善の方法における記述に生かしているか，「志と力シート」と学期末「キャリアノート」を照合した。「志と力シート」の記述を活用して学期末「キャリアノート」に記述している人数は，表13のようになった。表13から，約７割の生徒が「志と力シート」の記述から，自分のよさや課題，改善の方法を考えていたと捉えられる。

表13　「志と力シート」の記述を活用して学期末「キャリアノート」に記述している人数

学年	人数	割合（%）
第１学年（16人）	10	62.5
第２学年（20人）	15	75.0
第３学年（17人）	12	70.5
全学年（53人）	37	69.8

事後アンケートでの「志と力シート」を活用した感想の一部を以下に示す。

・自分は**全然成長できていないと思ったけど，「志と力シート」を書くと成長したことが分かった**ので良かったです。
・自分で頑張ったことやできたことを**振り返ることはあまりないので，いろいろなことを見付けることができた**のでよかった。自分の課題が見付かったので，それを改善できるようにがんばろうと思う。

「志と力シート」を活用した感想の一部

この感想の一部からも，「志と力シート」を記述することで，生徒自身が，自分の成長や具体的な課題を見付けることができていたと捉えられる。

また，「志と力シート」を活用せず，成長や課題などを記述している生徒については，運動会や総合的な学習の時間に関するもの，教科や授業に関するもの，生活に関するものであった。「志と力シート」の記述内容を直接的には活用していないが，学校生活を振り返ることとして活用できたのではないかと捉えられる。

以上のことから，具体的な学習を振り返りでつなぐ「志と力シート」を活用することによって，生徒自身が自己の成長や課題，改善の方法を考えることができたと考える。

(2) 自己の学びを振り返る過程に沿った学期末「キャリアノート」を活用することで，自己実現を図ろうとする態度を育成することができていたか

ア　事前・事後アンケートから

研究授業②の事前・事後アンケートの結果２を図７に示す。ｔ検定の結果，学期末「キャリアノート」を活用することで「大切にしたいことや努力したいことを考えることができた」「これから先の学習や活動について目標をもって取り組もうと思うことができた」に関して，有意な差（$p<0.01$）が見られた。また，事後アンケートで否定的な回答をした１人は，学期末「キャリアノート」に，大切にしたいことや努力したいことを書くことができていた。

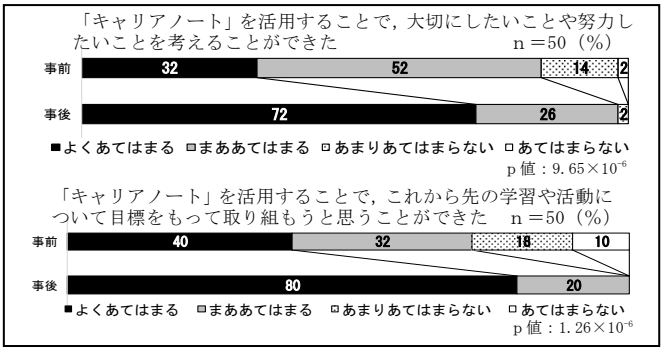

図７　研究授業②の事前・事後アンケートの結果２

さらに，研究授業②の振り返りでは，２学期や将来の自己について考えられるようになった，という記述内容が53人中44人であった。授業の振り返りの記述の一部を以下に示す。

・自分にとって大切なことや努力したこと，自分が付けたい力をどのように活用するか，考えたこともなかったので，今日考えられてよかった。
・七つの資質・能力の中からできていないところなどを見付け，どうしたら改善できるかを考えることができて，将来にも役に立ったと思った。

授業の振り返りの記述の一部

イ　自己の学びを振り返る過程における，②自己の成長と課題，改善の方法と，③学びの関連付け，一般化の記述をつないだ④将来の自己の在り方生き方を描くことができたか

学期末「キャリアノート」を活用し，自己の学びを振り返る過程を経ることで，自己実現を図ろうとする態度を育成することにつながったかどうかについて，表６の自己の学びを振り返る過程の②自己の成長と課題，改善の方法（以下②とする。），③学びの関連付け，一般化（以下③とする。）記述内容と，④将来の自己の在り方生き方（以下④とする。）の記述内容に関連性があるかを検証した。表14は，学期末「キャリアノート」の生徒ａ（第１学年）の記述内容である。

表14　学期末「キャリアノート」の生徒ａ（第１学年）の記述内容

項目	記述内容
②	自分から情報収集をしたり，発表の時には相手が聞きやすいようにゆっくり話したり，話を整理したりしながら発表したい。
③	「協力・協働」の力はいろんな場面で役立つと思います。（後略）
④	「課題対応力」「協力・協働」の力を大切に頑張りたい。２学期，「情報収集・判断」や「思考・表現」を頑張りたい。理由は１学期もう少し，頑張りたいところだったからです。（後略）

この記述内容から，②と③の項目で生徒自身が気付いたことを，④のこれから大切にしたい学びや努力したいことにつなげていることがわかる。

このように，②や③の内容と，④の内容を関連させている生徒の人数と割合を表15に示す。

表15　②や③の内容と，④の内容を関連させている生徒の人数と割合

学年	人数	割合（%）
第１学年（16人）	10	62.5
第２学年（20人）	11	55.0
第３学年（17人）	9	52.9
全学年（53人）	30	56.6

②や③の内容と④の記述内容を関連させた生徒の割合は，全学年で半数程度であったことがわかる。

一方で，②や③の記述内容と関連していない④の記述内容は，総合的な学習の時間に関するもの，育成を目指す七つの資質・能力に関するもの，２学期の行事や授業に関するものであった。いずれも具体的な学習や活動に関して自分を成長させたいという思いを記述しているが，自己の学びを振り返る過程をつなぎ自己の将来の在り方生き方を描くことにはなっていないと捉えられる。したがって，振り返る過程をつなぐ工夫が必要であると考える。

３　研究授業②の課題と改善案

(1) ②自己の成長や課題，改善の方法や③学びの関連付けをつないだ④将来の自己の在り方生き方を描くために

研究授業②では，②，③の記述と関連のない④を記述した生徒23人の中で，④に総合的な学習の時間に関する内容をした生徒が11人であった。これは，学期末「キャリアノート」の質問項目に「総合的な学習の時間で学んだことを生かして」という文言があったため，それに沿って記述した可能性があると考える。したがって，質問項目の文言を改善する必要がある。また，１学期末に記述した④についての自己評価をする場を設定し，自己の成長や課題を意識付け，２学期末の将来の自己の在り方生き方を描くことにつながるよう改善する。

(2) 学期末「キャリアノート」の活用する授業における改善（研究授業③）に向けて

研究授業②の課題と改善案を踏まえ，研究授業③を行う。

○月　日　　平成30年12月６日

○題材名等　研究授業②２時間目と同じである。

研究授業③の活動内容を以下に示す。

○「志と力シート」を見て，自己の成長や課題，改善策を考える。
○１学期に記述した大切にしたい学びについて，自己評価をする。
○自己の成長や課題，改善策，1学期の自己評価について，友だちと交流し，友だちの成長したところや，友だちへのアドバイスをカードに書き，伝える。
○学んだことを他の場面でも活用できるか考える。
○今後大切にしていきたい学びについて考える。

研究授業③の活動内容

「調査研究協力者会議」では，学級活動35時間のうち，「キャリアノート」の活動に偏重しないようにするためにも，３時間を目安にするのが適切であろうと指摘されている。このことから，学期末や学年末の振り返りには,実施時間を１時間に設定する。そこで，「志と力シート」の活用を事前の活動内容とし，生徒が事前に記入できるよう学期末「キャリアノート」を改善する。改善版「志と力シート」を別紙資料４に，また，改善版学期末「キャリアノート」を別紙資料５に示す。

４　研究授業③の分析・考察

(1) ②自己の成長や課題，改善の方法③学びの関連付けをつないだ④将来の自己の在り方生き方を描くことができたか

②や③で気付いたことを④につなぎ自己の在り方生き方に関連させて記述できたかについて，検証した。研究授業③で②や③と関連した④を記述した生徒の人数と割合，研究授業②と比較したポイント数を表16に示す。

表16　研究授業③で②や③の内容と，④の内容を関連させている生徒の人数と割合

学年	人数	割合（%）	研究授業②との比較
第１学年（16人）	12	75.0	＋12.5
第２学年（20人）	13	65.0	＋10.0
第３学年（17人）	13	76.5	＋23.6
全学年（53人）	38	71.7	＋15.1

学期末「キャリアノート」において，㊇の質問項目を「各教科の学習，行事，生徒会活動などの取組で学んだことを通して，これから先，あなたが大切にしたいことや，努力したいことはどんなことですか」と改善したため，「志と力シート」の記述や学期末「キャリアノート」の自己の学びを振り返る過程を活用して記述できたと考えられる。表17に，学期末「キャリアノート」の生徒ｂ（第３学年）の記述内容を示す。

表17　学期末「キャリアノート」の生徒ｂ（第３学年）の記述内容

項目	記述内容
②	なかなか発表できなかったので，意見があったらとにかく手を挙げるようにしたい。まちがっていると思っても，手を挙げる。
③	協力・協働は学校の活動や地域の活動でも役立てることができる。どんな場面でも必要。協力しないと何もできない，何も始まらないと思います。
④	挑戦・探究，思考・表現を努力していきたい。挑戦では，発表を進んでして，係も立候補したい。

自分の課題である「発表できなかった」ことについて，「挑戦・探究」「思考・表現」という資質・能力につなぎ，「発表を進んでして，係も立候補したい」と記述している。所属校で育成を目指す資質・能力に基づいて自分の学習を振り返り，自分の大切にしたい学びや努力したいことを具体的に記述できていると捉えることができる。

これらのことから，学期末「キャリアノート」を活用して，②や③をつないだ④を記述することができたと考える。

(2) １学期末，２学期末に学期末「キャリアノート」を活用したことは，将来の自己の在り方生き方を描くことに効果的だったか

１学期末，２学期末に学期末「キャリアノート」を活用したことが，将来の自己の在り方生き方を描くことに効果的だったかについて，授業の振り返りを用いて検証する。

研究授業③の振り返りの自由記述の内容では，１学期と２学期を比較して自己の成長や課題に気付く記述が53人中28人であった。以下は生徒の記述の一部である。

○１学期にあまりできていなかったことが２学期にできるようになっていたのでよかった。けれど，１，２学期とも「挑戦する」ということができていないのでがんばりたいです。
○自分ができたこと，がんばったこと，改善することを「キャリアノート」にまとめることで，次の学期につながる。振り返りをして，次の学期にはどのようにそれを生かすかを考えられたと思います。

１学期と２学期を比較して自己の成長や課題に気付く記述の一部

その他の記述は，２学期末の自分の成長や課題に関する気付きが21人，友だちからの評価に関する感想が６人であった。このことから，１学期末と２学期末に学期末「キャリアノート」を活用することで，生徒自身が，１学期と２学期の自分を比較し，自分の成長や課題を実感したり，課題に向けて改善しようとしたりしている姿が見られたと捉えられる。

(3) 記述内容の質的変容における検証について

次に，昨年度末に生徒が記述した「キャリアノート」と今年度１学期末，２学期末の「キャリアノート」の生徒の記述内容を比較し，振り返る過程の有効性を検証する。所属校では，年度末に広島県教育委員会が作成した「わたしのキャリアノート～夢のスケッチブック～」（以下広島県「キャリアノート」とする。）を活用していた。

広島県「キャリアノート」では，振り返りのアンケート項目について，「振り返って思ったこと」を記述する（以下広島県Ａとする。）欄と，「夢を叶えるためにどんなことをがんばっているか」について記述する（以下広島県Ｂとする。）欄がある。この２項目と，今年度１学期末，２学期末の④将来の自己の在り方生き方の記述内容を比較する。この項目は，約７割の生徒が将来の自己の在り方生き方を記述していた箇所である。表18，19に，生徒ｃ（第２学年），生徒ｄ（第３学年）の広島県Ａ，Ｂと今年度１学期末，２学期末の④の記述内容を示した。

広島県Ａについて，生徒ｃは，振り返りの感想を「あまり変わっていない」「考え方は変わっていると思います」と記述している。また，生徒ｄは，（自己の将来について）「早めに見付けたい」と記述している。両名とも，自分自身の学習や活動を振り返った記述にはなっていないと捉えられる。また，広島県Ｂにおいても，夢を叶えるためにがんばっていることについて，生徒ｃは（プロ野球選手になるために）「自主練してクラブチームでプレーする」，生徒ｄは「やりたいことをまず見付ける」と記述している。将来の就きたい職業についてどんなことをするかという記述になっていると捉えられる。

一方で，今年度の１学期末，２学期末の④では，将来の自己の在り方生き方を記述する際の根拠が，太字で示しているように，「志と力シート」での記述や，学期末「キャリアノート」の振り返り過程で記述したことに基づいた将来の自己の在り方生き方を記述していると捉えられる。

表18　生徒ｃ（第２学年）の広島県Ａ，Ｂと今年度１学期末，２学期末の④の記述内容

項目		記述内容
広島県	A	前の学年と比べてあまり変わっていないと思います。ですが考え方は変わっていると思います。次の学年に向けて，これらのことをしっかり考えていきたいと思います。
	B	空いた時間があればちょっとでも自主練してクラブチームでプレーする。
今年度一学期末	④	**どんな仕事でも，場合でも責任・使命が必要だと分かった**ので，これからいろんな仕事を与えられると思いますが，与えられたら，絶対にやりきる使命感を心に刻んでしっかり努力していきたいです。
今年度二学期末	④	**協力・協働がどんなときでも大切だ**と思いました。起業プロジェクトや授業の時でも一人じゃできなかったことを複数でやるといろんな意見が出たからです。もっと情報収集・判断なども，修学旅行もあるので身に付けたいです。

表19　生徒ｄ（第３学年）の広島県Ａ，Ｂと今年度１学期末，２学期末の④の記述内容

項目		記述内容
広島県	A	自分の就きたい職業や進みたい学校を早めに見付けておきたい。
	B	自分のやりたいことや似合っていることをまず見付けて勉強する。
今年度一学期末	④	自分から**新しいことにチャレンジしよう**としたり，深く考えることがほとんどないので，**挑戦・探究を大事にする**。
今年度二学期末	④	**友だちに書いてもらったように，人間関係をもっと大切にしていきたい。Q6で書いたように「思考・表現」「責任・使命」「挑戦・探究」はこれからも重要になってくる**ので，もっと伸ばせるように努力したい。

このことから，生徒ｃ，ｄともに，広島県「キャリアノート」の記述と学期末「キャリアノート」を比較すると，学期末「キャリアノート」の記述が，生徒自身の具体的な活動の振り返りを根拠にして，自己の成長や課題に気付き，将来の自己の在り方生き方を描くことができたと考えられる。

(4) キャリア教育アンケートによる検証について

研究授業③の後に，全校生徒を対象にキャリア教育アンケートを実施した。キャリアプランニング能力における４月と12月の結果を比較したものを表20に示す（４段階評定尺度法）。

表20　キャリアプランニング能力における４月と12月の結果　ｎ＝53

実施月	第１学年	第２学年	第３学年	全学年
４月	3.52	2.78	3.29	3.09
12月	3.57	3.12	3.39	3.21

この結果から，生徒のキャリアプランニング能力が上昇していることがわかる。特に，４月に学年の中で最も低かった第２学年において，肯定的評価となっており，各学期で行った「プロジェクト学習」を振り返ることで自己の学びをつなぎ，自己の成長

と課題に気付き，将来の自己の在り方生き方を描くことにつながったと捉えられる。

５　研究授業②，③の成果と課題

以上のことから，学校の教育活動全体を横断的につなぐ学期末「キャリアノート」を活用し，具体的な学習の振り返りを「志と力シート」でつなぎ，自己の学びの振り返りの過程に沿って，生徒が成長や課題，改善の方法に気付き，将来の自己の在り方生き方を描くことができたと考える。また，学期末ごとに実施することも，各学期の振り返りをつなぎ，自己の成長と課題に気付き，自己実現を図ろうとする態度の育成につながったと考える。

課題として，「志と力シート」を書く時間をどのように確保するかということが挙げられる。所属校では，各プロジェクト学習の終了時に生徒が記入できるよう連携を図ることができた。学校の実態に応じた時間の設定が求められると考える。また，１学期末，２学期末の「志と力シート」及び学期末「キャリアノート」を受けて，３学期，学年末の「キャリアノート」をどのようにつないで活用するか，研究を進める必要がある。

６　学年末「キャリアノート」の作成について

改善した学期末「キャリアノート」を基にして，学年末の「キャリアノート」を作成し，別紙資料６に示す。

Ⅷ　卒業期「キャリアノート」を活用する研究授業④について

１　研究授業④の概要

研究授業④の概要を表21に示す。

表21　研究授業④の概要

項目	内容
月日	平成30年12月７日
題材名	９年間を振り返り，自分の成長を語り合い，将来の自分について考えよう
内容	（３）一人一人のキャリア形成と自己実現 ア　社会生活，職業生活との接続を踏まえた主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用
対象学年	第３学年（17人）
目標	小学校，中学校生活を振り返り，印象に残った「プロジェクト学習」や自分の成長を語り合い，将来の自分の姿について考えよう。
活動内容	○小学校生活や中学校での「プロジェクト学習」を振り返り，印象に残った学びについて，友だちと語り合う。 ○自己の成長や課題に気付く。 ○30歳になったとき，どんなことを大切にしていたいか，どんな役割を担っていたいか自分の思いをもつ。

２　研究授業④の分析・考察

(1) 語り合うことで，自己の成長や課題に気付くことができたか

ア　事後アンケートから

研究授業④の事後アンケート結果１を図８に示す。

図８　研究授業④の事後アンケート結果１

この二つの質問項目については，全員が肯定的評価であった。「よくあてはまる」の回答については，両者とも80％台であった。このことから，友だちと，学んだことや活動を語り合う活動は，自己の成長や課題を考える上で，効果的な手立てであったと捉えることができる。

イ　「語り合い」の実際について

研究授業④では「語り合い」で，中学校生活での学びをつなぎ，自己の変容に気付く場面を設定した。これは，話し手が，卒業期「キャリアノート」に記述し印象に残った「プロジェクト学習」等について語り，聞き手はそれに対して，相手の成長したところや課題について語るという場面であった。事後アンケートの自由記述では，生徒自身が気付かない自己の成長などを友だちに評価してもらえたという，他者評価のよさについての感想が見られた。

実際の語り合いの場面では，聞き手と話し手の両者で，話し手の課題を考えるペアが見られた。以下，語り合いで課題に気付いていく場面である。

（文化活動発表会について，二人で振り返りながら）
生徒ｅ　自分的には，**殻を破りきれてなかった**んじゃないかと思う。私自身，後悔するところもある。
生徒ｄ　**今の発言を聞いて**，絶対ではないんだけど，**もっと自分に自信をもったらいい**と思う。人の何倍もできるし，がんばっとったのに，できていないと思うのは，もっと自信をもったらいいと思う。

語り合いで課題に気付いていく場面

文化活動発表会の取組について，話し手の生徒ｅから「殻を破りきれてなかった」という感想が語られた。聞き手の生徒ｄは，その発言を基にして「いろいろ頑張ってきたんだから，もっと自信をもつべき」という話し手の課題を挙げることができた。これは，共に取り組んできた仲間ならではの気付きであり，アドバイスではないかと考える。

(2) 小学校・中学校生活を振り返ることで，将来の自己の在り方生き方を考えることができたか

ア　事後アンケートから

研究授業④の事後アンケート結果２を次頁図９に

示す。

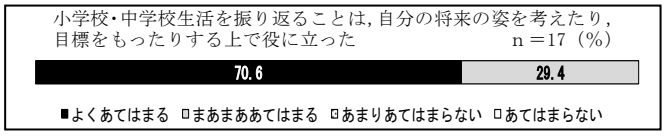

図９　研究授業④の事後アンケート結果２

「小学校・中学校生活を振り返ることは，将来の自分の姿を考えたり，目標をもったりする上で役に立った」の項目で，全員が肯定的評価であった。しかし，「よくあてはまる」は70.6%であり，成長や課題に気付いたという項目では80%台であったことと比較すると差が見られた。

イ　将来の自己の在り方生き方の記述について

卒業期「キャリアノート」では，「将来，30歳になったとき，どんな生き方をしていたいと思いますか，あるいは，社会でどんな役割を担っていたいと思いますか。」という項目で，将来の自己の在り方生き方を描く場面を設定した。

将来の就きたい職業や家庭像について記述している生徒が11人，将来どんな生き方をしたいか，ということについて記述している生徒が６人であった。以下30歳になったとき，どんな生き方をしていたいかの記述である。

○**人の役に立てる人**になりたい。
○**社会のために貢献できる人間**になって，**ありがとうを言ってもらえるような仕事**をしていたい。
○一人でも**多くの命を救う仕事**。「ありがとう」と言われ，**信頼される人**。

30歳になったとき，どんな生き方をしていたいかの記述

この記述から，人や社会の役に立ちたいという思いをもっていることがわかる。実際，６人全員が「役に立ちたい」という文言を記述していた。所属校の資質・能力の一つである「感謝・貢献」を目標とする姿が見られた。一方で，半数以上の生徒に，将来の自己の在り方生き方を描くことを促すことができていなかった。

３　研究授業④の成果と課題

以上のことから，卒業期「キャリアノート」の活用において，「プロジェクト学習」等の取組を振り返り，語り合いでつなぐ場面を設定することで，自己の成長や課題などに気付く効果があったと捉えられる。一方で，将来自分がどういう役割を果たしたいかという理想の自己を考えることについては，生徒の考えを促すことに十分つながらなかった。これは，「30歳」という年齢設定が生徒にとってイメージしにくかったためと考えられる。したがって，イメージしやすい年齢から設定したり，具体的な社会人のモデルを示したりする工夫が必要であった。また，より現実的な将来の自己の在り方生き方を考えさせるために，30歳になったときの社会状況を踏まえさせることも必要であったと考える。

Ⅸ　研究のまとめ

１　研究の成果

本研究では，学校の教育活動全体をつなぐ「キャリアノート」の活用に向けて，学校の教育活動全体を横断的につなぐ「キャリアノート」と，系統的につなぐ「キャリアノート」を作成し，活用した。別紙資料１に，その活用の仕方についてまとめた。

また，学校の教育活動全体を横断的につなぐ「キャリアノート」や系統的につなぐ「キャリアノート」の活用を通して，生徒が自己の学びを振り返ることで，自己実現を図ろうとする態度を育成することができた。

２　今後の課題

今後の課題として，次の２点が挙げられる。

○学年末を振り返る「キャリアノート」の効果的な活用。
○小学校・中学校生活の振り返りにおける，学校の教育活動全体を通した振り返りをつなぎ，将来の自己の在り方生き方を深める指導の工夫。

今後の課題

これらの課題についても研究を進め，学校の教育活動全体をつなぎ，自己実現を図ろうとする態度を育成する「キャリアノート」の効果的な活用を図りたい。

【引用文献】

1)　小泉令三・古川雅文・西山久子編（2016）：『キーワードキャリア教育　―生涯にわたる生き方教育の理解と実践―』北大路書房p. 3
2)　田沼茂紀（2013）：『心の教育と特別活動』北樹出版p. 29

【注】

(1)　中央教育審議会（平成28年）：『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）』p. 19，広島県教育委員会：「わたしのキャリアノート～夢のスケッチブック～」https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/06senior-2nd-career-sketchbook-sketch20top.html，稲葉茂勝著・長田徹監修（2017）：『みんなが元気になるたのしい！アクティブ・ラーニング③「キャリア・ノート」つくる意味とつくり方～「キャリア・ノート」は、きみの将来の宝もの』フレーベル館を参照されたい。
(2)　文部科学省（平成30年）：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編』東山書房p. 73を参照されたい。